

はじめに

企業や官庁に勤めている人の多くは、オフィスと呼ばれる施設で一日の多くの時間を過ごしています。朝早くに家を出て、満員電車で揺られてオフィスに到着。自分の席に着いてから、その日に外出の用がなければ（そして残業がなければ）午後6時くらいまで、ずっとそこで仕事をするようになります。言い古されたことですが、勤め人は一日24時間の3分の1、あるいはそれ以上の長い長い時間をオフィスで過ごしているのです。そしてほとんどの人は入社してから退職するまでの長い長い期間この毎日を繰り返しているのです。何の疑問を感じることなく。これが当たり前前のことだと思いがら……。『今日は空調の効きが悪いなあ』とか『なんだか照明が暗いんじゃないか』とか、『会議室の予約がいつもとれない』だとか『書類の収納棚が足りないよ』とか、働く上での多少の不満があってもそれを声にすること

なく、日々の生活は続いていくのです。もっとうすれば仕事はかどるようになるとか、ここが改善されれば気分よく働くことができるのになどとは考えることもなく、もしかすると考える暇さえなく、こうしたことが日常化してしまっているのが、日本の「はたらく」場の実態です。

私が会社に入って配属された部署は、オフィスで働く人たちが働きづらさを感じて本来なら改善すべき問題を明らかにし、その解決策を研究・開発する部署でした。少し大げさな言い方をすれば、オフィスの生産性を高めるために、働く「場」はどうあるべきなのかを考える組織ということになります。そして入社してからずっと同じ職場に勤めていますので、かれこれ40年もの間、私は日本のオフィスを中心にオフィス空間や働くためのツール、そして働き方をずっと観てきたことになりました。そんな人はあまり他にいないようなので、とても稀有な存在だと言えるかもしれません。そんな私が観てきた40年の間に、オフィスはずいぶん様変わりしました。そしておそらくこれから、どんどん変貌をとげていくことが予想されて

います。

今世間では働き方改革に関心が集まっていますが、新たな改善策を立てたり、より良い働き方を考えたりするとき、「はたらく」ということを全体的に理解しておくことはとても大切なことです。働く場所や働き方、働いている人などに関係する一つひとつの要素を過去から見つめ直し、なぜこれはそうだったのか、いつからこうなったのかを知った上で、これからの「はたらく」を考えなければなりません。

本書は「はたらく」に関する12のテーマを「〇〇」から「××」へ」という形式で、過去から現在そして未来の姿を語るという構成になっています。第1話から順番に読んでも、気になったタイトルの話からスタートしていただいても結構です。から、まずは手に取ってお読みください。そして読んだ後に「はたらく」ということについて改めて考えてみてください。これからの働き方ってどうなっていくのか、今働いているオフィスはどうしていけばいいのか……。そんなことを皆さんが考えるきっかけを本書がつくればと考え、今回筆を執ることにいたしました。どうか

気楽な気持ちでご一読ください。